

北海道東部，厚岸町汐見川低地において発見された巨大津波の痕跡とその広域イベント対比

Tsunami traces in peat layers at the Shiomi-gawa Lowland in Akkeshi Town, eastern Hokkaido

重野 聖之[1]; 添田 雄二[2]; 七山 太[3]; 古川 竜太[4]; 熊崎 農夫博[5]; 石井 正之[6]

Kiyoyuki Shigeno[1]; Yuji Soeda[2]; Futoshi Nanayama[3]; Ryuta Furukawa[4]; Nobuhiro Kumasaki[5]; Masayuki Ishii[6]

[1] 明治コンサルタント株式会社・北海道支社; [2] 道開拓記念館; [3] 産総研 海洋; [4] 産総研; [5] 厚岸町海事記念館; [6] 明治コンサルタント・札幌支店

[1] Meiji C; [2] Historical Museum of Hokkaido; [3] MRE, GSJ/AIST; [4] AIST; [5] Akkeshi Marin Memorial Senter; [6] Meicon Sapporo

北海道東部太平洋沿岸域は千島海溝に面する本邦屈指の地震津波の多発地帯である。同地域には、縄文海進以降に生じた湿原や海跡湖が多数存在することが知られており、近年、過去数千年間に渡って堆積した泥炭層および湖沼堆積物中の津波堆積物に関する研究が活発に行われてきている。このうち、浜中町霧多布湿原地域においては、過去3,000年間に生成された泥炭層中に10層のイベント堆積物の存在が、釧路市春採湖の湖沼堆積物中においては、過去9,000年間に約20層のイベント堆積物が、それぞれ確認されている。厚岸町は北海道東部太平洋沿岸の釧路市と根室市の間に位置し、この地域において最も古く建立された国泰寺の存在が知られている。国泰寺は、ロシアの南下に対する東蝦夷地の守備防備とアイヌの教化を目的として、江戸時代後期の文化元年（1804年）に建立された。現存する建物はほとんどが後代の改修を経ているが、蝦夷地における特異な歴史的役割を果たした重要な寺として、昭和48年に国の史跡（史跡国泰寺跡）に指定され、その遺跡は文化庁によって保護されてきた。現在の本堂は昭和58年に立て替えられたものである。この寺院には初代から9代目住職まで約60年間書き継がれた寺務日誌「日鑑記」が保管されている。この日鑑記には、道東地域において最も古い地震津波の被災記録、即ち1843年（天保十四年）十勝沖地震津波（ M_t 8.2）についての記述がある。これによると、同津波によって、現国泰寺の眼前に広がる低地に建っていた旧会所あたりが“大海のように覆われた。”という記述が残されている。このことから、津波は少なくともヒョウタン沼周辺付近まで侵入した可能性が高いと判断される。この史跡国泰寺跡において、重機によるトレンチ掘削を実施した。さらに、この史跡国泰寺跡からほぼ南東方向へ伸張する汐見川低地に沿って調査測線を設定し、沢奥において津波痕跡調査を実施した。その結果、当地域においても霧多布湿原において記載されたTs3~Ts10に相当する巨大津波の痕跡の存在が確認された。さらに17世紀と13世紀の津波痕跡の分布から、1843年津波の遡上高を遙かに凌駕し、2500m以上の汀線距離を持つ津波遡上が厚岸においても起こっていたことが明確となった。